

陸連時報 三

2016
平成28年 4 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

強化関連情報	166
第31回オリンピック競技大会(2016リオデジャネイロ)トラック&フィールド種目参加標準突破者一覧 2016年シーズンの抱負(強化委員会)	
2015年度全国競技運営責任者会議報告(競技運営委員会)	170
JAAF公認コーチ養成講習会 専門科目講習会報告(普及育成委員会 沼澤秀雄)	172
栄養セミナー 2016 開催要項	173
IAAF RDC/Beijing主催 Developmental Strategy Seminarに参加して (普及育成委員会普及政策部幹事 渡邊將司)	174
国際陸上競技連盟(IAAF)技術委員会報告 (陸連事務局事業部国際専任部長 関幸夫(IAAF技術委員会委員))	176
【訂正版】2015数字で見る陸上競技Vol.4 都道府県別高校生陸上競技部員割合	178
大会観戦ガイド	179
陸協NEWS	180
事務局からのお知らせ	182

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

第31回オリンピック競技大会 (2016/リオデジャネイロ) トラック&フィールド種目参加標準突破者一覧

【男子】

2016年2月24日時点

種目	派遣設定	記録	選手	所属
100m		10.09 -0.1	高瀬 慧	富士通
		10.09 0.3	桐生 祥秀	東洋大学
200m	◎	20.13 0.6	藤光 謙司	ゼンリン
	◎	20.14 1.0	高瀬 慧	富士通
		20.34 -0.4	サニブラウン アブデルハキーム	城西大学附属城西高校
		20.42 1.4	飯塚 翔太	ミズノ
400m		45.22	金丸 祐三	大塚製薬
5000m		13.08.40	大迫 傑	Nike ORPJT
		13.12.63	鎧坂 哲哉	旭化成
10000m		13.19.62	村山 紘太	旭化成
	◎	27.29.69	村山 紘太	旭化成
	◎	27.29.74	鎧坂 哲哉	旭化成
		27.39.95	村山 謙太	旭化成
		27.42.71	設楽 悠太	Honda
		27.45.24	大迫 傑	Nike ORPJT
		27.46.55	大六野 秀敏	旭化成
		27.55.02	宇賀地 強	コニカミノルタ
		27.55.40	山本 浩之	コニカミノルタ
		27.57.13	佐藤 悠基	日清食品グループ
		27.57.85	小野 裕幸	日清食品グループ
		27.58.40	横手 健	明治大学
400mH		49.08	野澤 啓佑	ミズノ
		49.14	松下 祐樹	チームミズノ
		49.17	岸本 鷹幸	富士通
走高跳		2.29	戸邊 直人	安藤財団
棒高跳	◎	5.77	山本 聖途	トヨタ自動車
やり投	◎	84.66	新井 涼平	スズキ浜松AC

【女子】

種目	派遣設定	記録	選手	所属
100m		11.23 -0.5	福島 千里	北海道ハイテクAC
200m		23.11 1.0	福島 千里	北海道ハイテクAC
5000m		15.08.29	鈴木 亜由子	日本郵政グループ
		15.16.43	宮崎 悠香	九電工
		15.16.82	尾西 美咲	積水化学
		15.17.62	鷺見 梓沙	ユニバーサルエンターテインメント
		15.20.20	西原 加純	ヤマダ電機
		15.20.21	森 唯我	ヤマダ電機
		15.21.40	上原 美幸	第一生命
10000m		31.37.32	高島 由香	デンソー
		31.44.79	清田 真央	スズキ浜松AC
		31.44.86	松崎 璃子	積水化学
		31.46.58	萩原 歩美	ユニクロ
		31.48.18	鈴木 亜由子	日本郵政グループ
		31.48.22	牧川 恵莉	スズキ浜松AC
		31.48.31	小原 怜	天満屋
		31.56.92	光延 友希	デンソー
		32.03.95	沼田 未知	豊田自動織機
		32.06.48	西原 加純	ヤマダ電機
		32.07.37	安藤 友香	スズキ浜松AC
		32.07.43	宮崎 悠香	九電工
		32.08.74	田中 智美	第一生命
		32.10.76	日高 侑紀	三井住友海上
		32.11.40	山崎 里菜	パナソニック
		32.12.25	松田 瑞生	ダイハツ
		32.12.54	関根 花観	日本郵政グループ
		32.13.21	岩出 玲亜	ノーリツ
		32.13.30	横江 里沙	豊田自動織機
		32.13.55	藪下 明音	豊田自動織機
		32.13.72	加藤 岬	九電工
		32.14.43	桑原 彩	積水化学
		32.14.58	野上 恵子	十八銀行
走高跳	◎	6.84 1.2	甲斐 好美	VOLVER
やり投	◎	63.80	海老原 有希	スズキ浜松AC

◎日本陸連派遣設定記録突破者

2016年シーズンの抱負

強化委員会

男子短距離部長 荻部俊二

2016年度はリオデジャネイロ・オリンピック開催年度であり、ロンドン・オリンピック後からの強化の大成とすべき一年である。また2020年東京・オリンピックに向けた位置づけをもつ重要な一年でもである。本年度最重要大会となるリオデジャネイロ・オリンピックでは、2008年北京・オリンピック以来の4×100mリレーのメダル獲得を目標としたい。また、短距離種目すべてにおいて入賞を目標としたいが、特に200mでは藤光謙司選手（ゼンリン）が20秒13、高瀬慧選手（富士通）が20秒14と入賞レベルの記録を持っており、彼らには入賞を期待する。また、100mでは10秒01の記録を持つ桐生祥秀選手（東洋大学）が昨年春の故障から順調な回復を見せ、昨秋には10秒09をマークするなど調子を戻してきた。黄色人種9秒台達成は、蘇炳添選手（中国）に先を越されてしまったが、悲願である日本人選手初の9秒台突入をぜひとも達成してもらいたい。400mでは金丸祐三選手（大塚製薬）が、昨年日本選手権11連覇を達成し、国内では無類の強さを発揮している。こちらも44秒台突入に期待をしたい。400mは北川貴理選手（順天堂大学）や佐藤拳太郎選手（城西大学）など大学生が記録を伸ばし、層が厚くなっている。4×400mリレーは、本年度の時点でリオデジャネイロ・オリンピックの出場権を獲得していないが、まずは金丸選手を中心に出場権の獲得を目指す。400mと同じように、本年度は次世代を担うであろう若手選手が台頭してきた。特に城西高校のサニブラウン アブデルハキーム選手は、世界ユース選手権200mで金メダルを獲得し、北京世界選手権でも準決勝に進出する活躍を見せた。サニブラウン選手のように2020年を担うであろう選手の出現にも期待したい。

また、JISSによる科学サポート、専任コーチとの連携を強固なものとし、チームジャパンとしての意識を高めていきたい。

女子短距離部長 瀧谷賢司

女子短距離ブロックの目標はリオデジャネイロ・オリンピックでの福島千里選手（北海道ハイテクAC）の大幅な自己ベスト更新、リレー種目は日本記録更新である。

この冬は“結果がすべて”と厳しい言葉を掛けながらここまで宿を重ねている。4×100mリレーにおいては2014年、2015年と世界リレー選手権には出場

したものの、2013年、2015年の世界選手権には出場することさえ出来ていない。つまり、このままでは世界の舞台に立つことさえも出来なくなるという危機感から取って厳しい言葉を掛けてきた。この崖っぷちの状況を打破するだけのたくましさがあればとても世界の舞台では戦えない、そういう強い気持ちでシーズンを戦っていきたい。4×400mリレーにおいては昨年の北京世界選手権で日本記録を1秒以上更新したにも関わらず、リオデジャネイロ・オリンピックリレー出場権獲得ラインのランク16位というのが現状である。このことは世界の舞台での日本記録更新はこれまでの女子短距離にとって大きな1歩であるが、世界のレベルという物差しに置きかえると僅かな1歩であることを示している。昨年の結果を大きな1歩と捉えていてはいつまで経っても世界選手権予選組7着という世界でのポジションは変えられない。世界という物差しの中で大きな1歩を刻めるような結果をリオでは目指したい。北京、ロンドン・オリンピック経験者を中心に、まずはリオの出場権を確実なものとし女子短距離のバトンを繋いでいきたい。

リオデジャネイロ・オリンピック参加標準記録を突破している福島千里（北海道ハイテクAC）選手はコツコツと努力を積み重ねてきたトレーニングが実を結び始め、心身ともに良い状態で着々と準備を進めている。一昨年は単身でオーストラリア合宿、昨年は単身でオーストラリア転戦と欧州転戦を実施した。これらの取り組みはリオデジャネイロ・オリンピックから逆算した強化戦略によるものであり、これまでの取り組みを結集させた福島千里に期待したい。

ハードル部長 櫻井健一

2016年はリオデジャネイロ・オリンピックが開催される勝負の一年であり、結果にこだわったシーズンとしていきたい。ハードル部の2016年シーズンの目標は110mHと、100mH、男女400mHのすべてのハードル種目でリオデジャネイロ・オリンピックに出場をする事。

具体的には、男子400mHでは2名の決勝進出とメダルの獲得、女子400mHでの決勝進出を目指します。110mHと100mHでは複数の出場と準決勝進出、オリンピック本番での日本記録更新を目標として強化を進めている。男子400mHでは前回のロンドン・オリンピック代表の岸本鷹幸選手（富士通）が復調してきておりオリンピックファイナリストを期待したい。さら

に松下裕樹選手（チームミズノ）、野澤啓祐選手（ミズノ）、小西勇太選手（住友電工）、若手の渡部佳朗選手（城西大）とオリンピックで戦える選手層が厚くなってきており、熾烈を極める代表争いがレベルアップにつながると期待される。

女子400mHは第一人者でありオリンピックの経験が豊富な久保倉里美選手（新潟アルビレックスRC）の復活に期待したい。年齢的にも最後のオリンピックになる可能性が高く、集大成としてこれまでの経験値を生かしてファイナリストを目指して欲しい。昨年の日本選手権者である吉良愛美選手（アットホーム）も成長著しく2人がハイレベルな戦いをする事で400mHのレベルが上がる事を期待したい。

110mHは昨年のユニバーシアードで同種目としては初のメダルを獲得した増野元太選手（国武大）に期待したい。世界大会での勝負強さは突出しておりオリンピックで戦えると期待が持てる。大室秀樹選手（大塚製薬）、矢澤航選手（デサントTC）、古谷拓夢選手（早稲田大）にもチャンスはある。オリンピックで戦う上で視線は標準記録ではなく日本記録更新を意識した取り組みをしていきたい。100mHは日本選手権者の紫村仁美選手（東邦銀行）が競技に専念するために所属を変え心機一転、オリンピックを目指す。さらにロンドン・オリンピック代表の木村文子選手（エディオン）も単身アメリカで強化を図っている。2人とも世界を視野に強化を図っており高いレベルでの競争意識を持って取り組んでいる。さらに田中杏里選手（甲南大）、青木益未選手（環太平洋大）も力を付けており2強を脅かしたい。こちらもオリンピックで戦うためには12秒台の記録が必須であり、日本記録更新を前提とした取り組みをしていきたい。

今年度が一つの強化の集大成となるが、この強化の成果が4年後の東京オリンピックにもつながるような充実したシーズンとしていきたい。

跳躍部長 吉田孝久

今年はいよいよリオデジャネイロ・オリンピックである。跳躍部ではここでのメダルを目標にロンドン・オリンピックからの4年間強化を進めてきた。昨年の北京世界陸上には跳躍部から6名派遣したが、いずれも予選落ちで満足のいく結果を残すことができなかった。今年は参加するだけでなく、本番での活躍もしっかりと視野に入れて強化を進めたいと考えている。

オリンピックに向けては、まずは参加標準記録の突破である。現時点では、棒高跳の山本聖途（トヨタ自動車）、走高跳の戸邊直人（安藤財団）、走幅跳の甲斐好美（VOLVER）が有効期間内にオリンピックの参加標準記録を突破している。これらに棒高跳の荻田大

樹（ミズノ）、走高跳の衛藤昂（AGF）と平松祐司（筑波大）、走幅跳の菅井洋平（ミズノ）ら昨年の北京世界陸上の代表らが参加標準記録を突破してくることが予想される。そして、走高跳の高張広海（日立ICT）、走幅跳の下野伸一郎（九電工）、ベテランの澤野大地（富士通）、女子棒高跳の我孫子智美（滋賀レイクスターズ）らにも記録突破の期待がかかる。

参加標準記録だけでなく、世界で戦うためには派遣設定記録の突破も必要となる。そのため、跳躍部では、好条件での記録突破を目指して海外での室内や遠征を計画している。先日の室内では、山本聖途がアメリカで5m75を跳び、標準記録ならびに派遣設定記録を突破した。ここでは荻田も5m55を跳び、あと少しのところまでと調子をあげてきている。走高跳でも高張がチェコで2m26を跳躍し、標準記録まであと3cmのところまで迫ってきた。これから始まる室内の選手権大会やオーストラリア、アメリカ遠征などを通じて記録突破のきっかけをつかみ、日本での春季サーキットなどで確実に高い記録を突破して欲しいと思う。

一方、2020にある東京オリンピックのことを考えるとこれらのトップ選手に加えて若手選手の台頭にも期待をしたいところである。中心となるのは、佐久間滉大（法政大）、橋岡優輝（八王子高）、江島雅紀（荏田高）らのダイヤモンドアスリートであろう。彼らにはトップ選手を脅かすだけでなく、若い力を一気に開花させ、標準記録突破も果敢に狙ってもらいたい。

投てき部長 等々力信弘

16年シーズンに向け主要強化選手からは、大きな問題なく冬期トレーニングを消化できていると報告を受けているので、各選手順調にシーズンインができると思われる。

各種目、リオデジャネイロ・オリンピックや、種目目標に向け、それぞれの活躍に期待したい。

砲丸投においては昨年日本記録をマークした畑瀬選手に19m以上をまず期待したい。男子砲丸は山元選手、宮内選手、中村選手などここ数年選手層に厚みが出てきているので、全体の底上と、5年前から回転投げの強化にも取り組んでおり、山元選手、中村選手には特に、回転投げでの記録更新を期待したい。女子砲丸投については低迷期ではあるが、若い有望な選手も出てきており、まずは17m台の記録を目指したい。

円盤投においては2014年に60m05の日本歴代2位をマークした堤選手に日本記録更新が期待される。ランキングでは堤選手が単独トップであるが、後に続く知念選手や若手の安保選手・米沢選手らが堤選手にどれだけ迫ることが出来るかに注目したい。女子は世界

との差があるが、坂口選手・藤森選手がどれだけ記録を伸ばすことが出来るかに注目したい。

ハンマー投については、昨年の日本選手権優勝者の野口選手の引退もあり、若手選手の保坂選手・赤穂選手・田中選手などに70m台の記録を期待したい。女子については、綾選手と渡辺選手の投げ合いから日本記録を超える記録に期待したい。

やり投については、リオデジャネイロ・オリンピックに向け、男子では新井選手を筆頭に、村上選手、ディーン選手などに、女子では海老原選手を筆頭に、北口選手など若い選手にそれぞれ参加標準記録を突破させ、男女ともに世界選手権へ複数名エントリーさせることを目標とし、その中から上位入賞、メダル獲得を期待したい。

混成部長 本田陽

今年は2008年の北京オリンピック（混成ブロックからの代表派遣なし）以降継続している長期計画の一区切りとなる集大成のシーズンであり、当然リオデジャネイロ・オリンピックでの成果が最も大きな目標である。リオデジャネイロ・オリンピックまでの長期計画はこれまで順調に進んできたが、昨年は最大の目標であった北京世界選手権での入賞及びそれによるリオデジャネイロ・オリンピック代表枠早期確保は達成することができなかった。昨シーズン終了後は選手、スタッフ共に目標を達成できなかった要因の分析とそれに対する対処方法について徹底した検証がなされ、その修正に基づいて冬季トレーニングを開始し、現時点（2016年2月）では順調に計画が進んでいる。右代選手（スズキ浜松AC）は部分的に練習拠点をアメリカに移し、現地の十種選手とのトレーニングを行いながら1月には室内七種に出場。棒高跳では記録なしに終わったが、それ以外の跳躍、投てき種目では過去の室内での記録を上回っており順調に冬季トレーニングが進んでいる。中村選手（スズキ浜松AC）に関しては、1月にドイツ室内混成選手権にオープン参加、自己の持つ室内日本記録を更新する5725点をマークしており、さらに2月のアジア室内選手権に出場する予定である。

右代、中村両選手共にまだリオデジャネイロ・オリンピックの参加標準記録を突破しておらず、まずは混成日本選手権（6月11～12日長野）で代表を確保することが最優先であるが、それだけに終わらずその先の本番で結果が残せるようなシーズンインを目指している。

リオデジャネイロ・オリンピック後2020年の東京五輪に向けては第2、第3の右代・中村選手を育成していくことが急務であるが、昨年は次期日本代表選手

を育成するための若手合宿を関東学連との合同で2回実施した。また、混成女子だけの合宿や跳躍ブロック女子との合同合宿なども開始し、今年すでに2回実施している。若手合宿・女子合宿ともに今年は回数・内容ともにさらに充実させていく予定である。男子トップ選手強化に特化した対策から、若手及び女子の育成とのバランスを取った強化対策に移行していくのが今年のプロックとしての方針である。

女子部部长 瀧谷賢司

これまで女子トラック&フィールド種目（中長距離ロード種目を除く）のオリンピックでの入賞は男子のそれと比較して圧倒的に少なく、世界選手権での入賞者はいない。さらに、リオデジャネイロ・オリンピック参加標準記録突破者は僅か3名である。これまでの歴史と現状に対する強い危機感から北京世界選手権後、新たに女子ブロックが設置された。女子をしっかり強化していこうというこの機を大切に捉え、選手、専任コーチ、強化スタッフをはじめ女子選手の強化育成に関わるすべての英知を結集させて、皆でひとつの方向に向かって進みたい。また、北京世界選手権に出場した海老原有希（スズキ浜松AC）、福島千里（北海道ハイテクAC）の経験や競技に取り組む姿勢、世界で戦うことがどういうことなのかを下の世代がしっかりと感じ取り、世界にもっと目を向けさせることが必要である。ベテランが存在感を示し、中堅が負けじとアピールする、そこに若手が台頭するような好循環を生み出すためにナショナルチームのサポート体制を構築していきたい。

女子の中心となるのは海老原選手（スズキ浜松AC）、福島選手（北海道ハイテクAC）に甲斐好美（VOLVER）を加えたりオの参加標準記録突破者である。この3名については選手、専任コーチのこれまでの取り組みを集約させ、オリンピックで目標を達成するために、各ブロック、医事委員会と連動しながらサポート体制の充実を図る。また、2020年をターゲットに強化する競技者については個々の課題、特性に応じたテラーメード型強化を展開し「個を高める」ための強化システムを構築していく。1人でも海外にどんどん出て、海外で戦うことが当たり前となるように選手の意識を変え、まずはアジアで戦うこと、その上で国際大会でのファイナル進出という夢を実現できると信じ取り組んでいきたい。

2015年度全国競技運営責任者会議報告

競技運営委員会

標記の会議を2016年2月13日(土)、14日(日)、味の素ナショナルトレーニングセンターで開催した。

以下会議の概要を報告する。

第1日目(2月13日)

開会あいさつ 尾縣 貢 専務理事

・いよいよオリンピックイヤーとなった。リオが終了すれば東京オリンピックである。オリンピック終了後、レガシーとして競技者育成のシステムと競技運営について残していきたい。

鈴木 一弘 理事・競技運営委員長

・今回は資料が膨大となった。一つは競技ルールの修正が多くなった。これについては、しっかりと見ていただき、持ち帰っていただきたい。もう一つは広告規定が本委員会管轄となったことでその資料も盛り込まれている。

事務連絡 梶田 茂 審判部幹事

資料の確認。資料の追加販売について。IAAFルールブック販売について。

2016年度競技規則修正提案

黒澤 達郎 審判部委員

・資料P 3～P34 条項の移動が多い。
・誤字脱字は4月発行のルールブックで直していく。
・shall,must,shouldの使い分けは来年度の課題。
・2020年オリンピックに向け、ルールの国際化を図っていく。
・修正は、名称の変更・内容の変更・スタートリスト、リザルトへの略語・スタート・同成績・やり投の助走路・混成競技・世界記録などあり。

施設用器具委員会報告

高木 良郎 施設用器具副委員長

・廃止の競技場について、種別変更の競技場、名称変更の競技場について。検定延期の競技場について。
・長距離走路・競歩路の説明。公認競技会を行わないと認めないことから、減少した。
・公認陸上競技場および長距離競走路ならびに競歩路規程の修正について説明。

競技会における広告および展示物に関する規程

関根 春幸 競技部長

・法制委員会から競技運営委員会へ担当が移管したので、もう一度すべてを見直してみたが、大きな変更はないのでご確認いただきたい。
・スペースブランケットの解釈について、競技者の着用するウインドブレイカーやウォームアップコートなどは含まれない。
・ナンバーカードの広告について、広告を掲出することができるが、陸連に相談をする。

・競技役員防寒具等についての広告規定は2018年度から適用する。

・個人スポンサーについては2017年度から適用する。

競技会実施報告

・各道県より報告書を資料にて確認。

JTOs活動総括 中島 剛 審判部副部長

・2015年度は主催・共催・後援の32大会に延べ50名のJTOsが派遣された。各JTOs報告の中から共有すべき事例を、「トラック競技」「跳躍競技」「投てき競技」からそれぞれ取り上げ、対応策を確認した。

JTOs/JRWJsセミナー報告

岩崎 義治 審判部長・藤崎 明 審判部委員

・JTOsは2020年のオリンピック競技運営で中核をなす。8時間の講習と3時間半にわたる試験を行い37名が受講・受験し17名の合格。2016年度からは今回の合格者を含め55名で活動する。

・JRWJs育成セミナーでは競歩競技関連規則及び競技会運営の研修とピットレーンルール対応の模擬レースを行った。認定試験は21名受験し、5名が合格。

2020年オリンピックに向けての競技会運営・審判育成について

鈴木 一弘 競技運営委員長

・オリンピック東京大会に向けて(準備状況)2015年から大きな進展はないが、国立競技場完成が2019年11月となったことにより準備状況に変化あり。リハーサル大会の設定が明確になってきた。
・競技役員編成指針(オールジャパン体制で臨む・オリンピックレガシーとなることを考慮・夏場の暑熱環境下で行われることを考慮・年齢制限を設ける・主任クラスは英会話ができることを前提、OA化IT化を前提としフィールド内をすっきりさせる等)

国際競技会報告

○アジア選手権 岩崎 義治 審判部長

○世界選手権 赤峰 俊彦 競技部幹事

・それぞれ海外の視察報告。

○世界選手権TD報告 関 幸生 国際専任部長

・多くの取材写真、事例を交え、国際競技会の運営方法や状況について解説があった。

1日目 質疑応答

Q(静岡)略号の変更。コンピューターシステムが簡単に変更できないのではないかと1000分の1の判定についてもシステム変更できるのか?略号は有効期間を設けて欲しい。

A(関根)略号については対応できるものについては順次対応していただいて構わない。ルールについては2020年に向けて国際化という部分もあるのでご協力いただきたい。

事務連絡 羽田 雄一 競技部幹事

明日の集合時間・場所、名札の扱い、短冊について。

第2日目(2月14日)

(審判部会)

公認審判員昇格審査結果について

梶田 茂 審判部幹事

・昇格審査報告。

競技運営上の改正・改良点

競歩におけるピットレールルール運営方法

藤崎 明 審判部委員

・ピットレールルール：第230条7cに追加された。すべての競技会でされるのではなくユース育成のための一部の競技会だけで実施されるものである。

Q (JTO：今野) ピットレールを行った場合の記録の扱いは？

A (藤崎) 公認記録になる。

跳躍競技決勝を2ピットで行う場合の運営方法

鈴木 一弘 競技運営委員長

・走高跳：2ピットをできるだけ同時に進行させる。両方のピット合わせて4人未満になったら試技に許される時間を2～3人用に変更する。この時の順番は1組→2組というように予め決めておく。それぞれのピットで独立させて進行させるのは予選がある場合や混成競技の時である。

・走幅跳：TOP 8に入ったらそのままのピットで、記録の低い順番に試技を実施していく。一つにまとめる必要はない。

不正スタートの扱いの改正 長濱 和明 審判部委員

・不正スタートは、混成を除き1回で失格とし、号砲直前の局所的な動きに対する黄/黒での警告は廃止し、グリーンカードでの注意に切り替える。

(意見及び質疑)

Q (滋賀：中江) 注意2回で失格ではないのか。

A (岩崎) グリーンカードは何枚出しても変わらないが、何度も注意が与えられた場合、審判長の判断でイエローカードが出される場合もある。

(競技部会)

公認競技会開催申請 井上 博行 競技部委員

・公認競技会の申請手順について2月20日が申請期限。陸上競技マガジンの別冊の原稿締切があるので未定でも提出をお願いしたい。

記録公認の申請 赤峰 俊彦 競技部幹事

・単一競技会の記録申請はエクセル形式でも可能である。投擲、ハードルは重さや高さを表示していただきたい。砲丸投げ(6.000Kg)等。

高橋 克実 陸連分室(ベースボールマガジン社)

・35都道府県陸協で8割以上の申請となった。
・プログラム冊子に「公認競技会」であることがわかりやすいような工夫をお願いしたい。

日本記録申請に必要な資料

羽田 雄一 競技部幹事

・申請手続について再度確認を。

・日本記録が作られた場合は30日以内に本連盟に連絡し、必要資料を提出すること。特に海外で行われた競技会で記録が作られた時には、注意が必要。

(日本記録として削除する種目の承認)

・メドレーリレーと35kmの日本記録は削除。

記録用紙の変更・略号 杉本 太郎 競技部副部長

・各種用紙の変更及び、略号・略称について説明。

広告・展示物規程 関根 春幸 競技部長

・Tシャツ、ジャージ上下、ウインドブレーカー等広告規定に抵触するものがたくさんある。抵触するか迷う場合は陸連事務局に相談していただきたい。

・防寒具の猶予期間を2年間にした経緯を説明した。
・4月からすべて変更することは困難であり、どうしても解決できないケースがあれば、陸連まで相談してほしい。

(質疑応答)

Q (高知) クラブチームのユニフォームの広告について、大きさ・長さについてはどうなのか？

A (関根) 高さ4cm、面積40cm²であれば段数は問わない。

(全体会) 分科会報告

岩崎 義治 審判部長・関根 春幸 競技部長

・それぞれの部会の決定事項について説明。

全体質疑応答

Q (神奈川) スターティングブロックの定義について、フットプレートのみという解釈でよいのか？

A (鈴木) 国際陸連にも趣旨を聞いている。フットプレートのみがブロックであるという認識である。

コメンテーターより 吉儀 宏 特別委員

・今回の会議は東京オリンピック・パラリンピックに向けた国際化の足掛かりとなるものである。

・皆さんが各都道府県に伝達していくことは非常に困難な資料の量である。ぜひ、今回の会議を受けて、大切な部分をピックアップして伝達してほしい。

事務連絡 梶田 茂 審判部幹事

・名札の回収、短冊の配布、昼食について、IAAFルールブックについて。

閉会あいさつ

鈴木 一弘 理事・競技運営委員長

・2日間、お疲れさまでした。

・一方通行的な伝達だけでなく、意見交換もあり有意義な会議となった。

・今年はオリンピックイヤーである。良くも悪くも陸上競技が注目されるが、選手がよいパフォーマンスを発揮できるよう、いい競技運営を行っていただきたい。

JAAF公認コーチ養成講習会 専門科目講習会報告

普及育成委員会 沼澤 秀雄

JAAFコーチ（公認コーチ）養成講習会を2015年12月23日～26日の4日間の日程で、味の素ナショナルトレーニングセンターを会場にして開催した。公認コーチ養成の目的は、国内トップレベルの競技者の指導・育成・強化にあたる指導者を養成することである。受講資格は各都道府県陸協、及び日本陸連から推薦を受けた者に限られ、都道府県陸協で強化担当を務める中学、高校や大学の教員、現役を引退したアスリート、実業団所属の指導者等57名が受講した。資格取得には日体協主催の集合研修（他競技と合同）40時間と（その他研修152.5時間）を受講した上で、当連盟主催の集合研修40時間、自宅学習20時間を受講し、試験に合格する必要がある。

講習会は基礎理論と実技に分けて実施した。基礎理論では日本陸連の尾縣専務理事から2020年東京オリンピックへ向けた日本陸連の強化方針、タレントトランスファー（競技・種目変更）の考え方、医事委員会の山澤委員長から、アンチドーピングに関する最新情報についての講義が行われた。グループワークではテーマに対するディスカッションを行い、ポスター発表・プレゼン、質疑応答を行った。実技では、短距離、ハードル、競歩、跳躍、投てきと幅広く種目別指導が行われた。また、今年度より実技のなかに種目別指導演習を導入した。その内容としては指導している専門種目の指導案を作成してもらい、それに沿って指導実践を行い、国際陸連レベル1講師資格を持つ講師によって評価とフィードバックを行うというものであった。受講生からの声として、いろんな種目の指導方法を体験できてよかった、指導についてのポイントがわかってよかったといった感想や意見が多く寄せられた。指導実践の進め方等をさらに検討して、来年度以降も、コーチングスキルの演習としての指導者同士が

積極的に意見交換できる場を設けていきたい。なお、専門科目講習会の合格者は、掲載の通りである。

日本陸連は、公認の指導者を5000人養成することを目指し、2013年度よりJAAFコーチ（公認コーチ）とJAAFジュニアコーチ（公認指導員）の新制度へ移行した。今後も、公認資格取得の啓蒙活動を積極的に行い、各都道府県陸協と連携をして2020年東京オリンピックに向けてより多くの公認コーチを養成していきたい。一方で資格取得者が資格を失効することがないように資格更新の義務研修の情報発信等の取り組みを行い、公認資格取得者の指導力向上の支援に努めて参りたいと考えている。

2015年度JAAF公認コーチ養成講習会専門科目講習会合格者一覧

吉川 三男	上田 心
兼本 貴史	宮田 貴志
小田桐 淳	久保 樹
仁科 貞晶	杉林 孝法
齋藤 大輔	奥浦 大
谷内 雄亮	山尾 英二
大庭 恵一	森澤 公雄
竹内慎一郎	今井 順也
田邊 洋史	高城 歩
小森 清敬	池田 博士
眞鍋 芳明	小川 欽也
香取 隆介	櫻井 健一
曾我 元志	近藤 鷹之
山道 修平	嶋田 祐也
菅野 功	太田 和憲
北脇 剛	碓井 崇
鈴木健太郎	相馬 聡
小林 知樹	田山 慶
門野 洋介	堂脇 純二
大澤 勉	比留間浩介
広川龍太郎	柴田 孟也
豊嶋 茂樹	内田 智子
海老名貴之	三代澤芳男
海老沢雅人	加藤 伸栄
滝田 輝行	中村 兼希
古川 和英	柴田 剛
小林 弘幸	高屋敷真悟
中尾 暢介	油谷 憲治
小川 侑也	森 健一



指導実践の様子

栄養セミナー 2016

開催 要項

日本陸上競技連盟では2008年より食育プロジェクトを立ち上げ、選手指導者に対する教育プログラムなどを実施しています。この度選手の栄養サポートに関わる方に広く集まっていただき、栄養セミナーを開催することといたしました。第1回となる今回は「貧血について考える」をテーマに開催いたします。

アスリートにとって「貧血」は非常に重要な課題であります。安易に薬剤に頼らないためにどのような栄養サポートができるのかについて考えていきます。

主催：公益財団法人日本陸上競技連盟

協力：大塚製薬株式会社

日程：2016年4月10日（日）13：00～17：00

会場：味の素ナショナルトレーニングセンター大研修室

テーマ：「陸上選手の貧血について考える」

・ **講演：**

「貧血の種類と成因、血液データの読み方」 真鍋知宏 医事委員

「貧血対処方法に関する諸問題（サプリメント、鉄剤、鉄注射問題等）」
山澤文裕 医事委員長

・ **トークショー：**

「貧血との闘いを乗り越えて」 室伏由佳 普及育成委員
デモレーター 長坂聡子 普及育成委員

・ **パネルディスカッション：**

「長距離選手の貧血について考える」
パネリスト 増田明美 評議員
山下佐知子（第一生命女子陸上競技部監督）
赤羽有紀子（ホクレン） 他

・ **宣言**

*内容およびスケジュールは変更になる場合があります。

参加費：無 料

参加資格：指導者、実業団、大学、高校、中学などの陸上競技チームに関わっている方（指導者、トレーナー、SCコーチ～など）、都道府県陸協関係者

参加人数：先着120名

申込方法：下記URLより必要事項をご記入の上、お申し込み下さい。

<http://www.jaaf.or.jp/medical/nutritionseminar.html>



*本講習会は日体協公認スポーツ指導者の義務研修として認められます

IAAF RDC/Beijing主催 Developmental Strategy Seminarに参加して

普及育成委員会普及政策部幹事 渡邊將司

2015年12月11日（金）から13日（日）の3日間、中国珠海市にある珠海市体育学校内でIAAF Beijing主催のDevelopmental Strategy Seminar（育成戦略セミナー）が開催された。RDC Beijingのテクニカル・ディレクターである孫南氏のコーディネートのもと、国際陸連のDevelopment & Member Relations DepartmentのディレクターであるMalek EL Habil氏がセミナーを担当した。東アジア9か国（中国、韓国、モンゴル、台湾、香港、マカオ、ベトナム、ラオス、日本）から16名が参加し、日本からは普及育成委員会・普及政策部幹事の渡邊將司と事務局の三宅聡が参加した。通訳として、北京体育大学の李曉慧氏にもご協力いただいた。

セミナーで行われた各講座の内容について下記に報告する。

Opening introduction to the seminar

孫氏より、はじめの挨拶とメンバーの紹介が行われた。引き続き、Malek氏より、今回のセミナーの趣旨についての説明があった。陸上競技を発展させるにあたって、各陸連の考え方を知りたいということ、各陸連の発展が国際陸連の発展につながるということ、各国の交流や協力を促進してほしいこと、そのためには顔を合わせることが大切であることを述べた。その後、国際陸連の組織図についての説明がなされた。

IAAF Development & member relations department

陸上競技を発展させるにあたり、最も難しいのは「陸上競技文化」であることを強調していた。つまり、ハイレベルの選手の輩出と陸上競技文化が関連しており、ハイレベルの選手を輩出することは、予算の獲得にもなり、普及・育成にもつながるとのことである。陸上競技文化が根付いていない国では予算が少ないが、モロッコやケニアでは、低い予算でも強化が比較的やりやすい中長距離走の強化から始めた例を紹介した。しかし、発展するためには時間がかかるし、発展のための様々な条件（強化、環境、行政、サービスなど）は1つが崩れればすべてが機能しなくなるということを歯車の模式図で説明した。

Development activities

国際陸連のコーチ教育認定システム（CECS：Coach Education and Certification System）の区分や講義日数などが2016年から変更される旨の説明があった。これまで5段階だったレベルを3段階にするとの内容であった。開

催日数も1～2日減少し、テキストもリニューアルされることであった。テキストは5か国語に翻訳され電子本となる（約800ページ）が日本語訳は自分たちで行って欲しいとのことであった。

IAAF kid's athletics & teen's athletics programs

陸上競技の実施割合は、8～10歳で100%、12～15歳で25%、18歳以上では1%に減少しており、どのようにして子ども達に、陸上競技に興味を持たせるかが鍵だという。ゲーム性を持たせるために、様々な種目を展開することが有用であり、kids' athleticsで用いられている用具一式はそれを意識している。しかし既存の用具を使わなくても、タイヤや枝などを用いてKids' athletics programsを実施している国もある（エクアドルなど）。

日本においては、陸上競技のすべての種目に高校生から取り組むことができるが、そういう国は珍しいとのことであった。また様々な国で、投てき物の重量を軽くしたり、あるいはサイズを短くしたりするなどの工夫をほどこしているという。

IAAF RDC Beijing

はじめに、中国陸上競技連盟の会長である杜兆財氏より、東アジア諸国との交流を促進したいこと、中国にはHigh Performance Training Centerがあるので、他国でも利用してもらいたいとの挨拶があった。

孫氏より、RDCの役割についての説明があった。RDCは陸上競技の発展のために置かれたセンターで、アジアでは北京とジャカルタに設置されている。北京のRDCは1994年に設置されており、セミナーの開講、講師の派遣、出版物の刊行などを行なっている。特にCECSのレベルⅢ（旧システム）以上においては、多くの国で有資格者を増やすために、開催国をローテーションするようにはどうかという意見が述べられた。

アジア諸国は世界と比較するとレベルが低い。その背景の1つにコーチのレベルを挙げていた。中国は北京世界選手権（2015年）に向けて、各国の優秀な指導者を招聘し、選手を指導する際には中国のコーチも帯同させることで、コーチのレベルアップを上げる取り組みをしていたことが紹介された。

Olympic solidarity programs

Malek氏より、オリンピック基金についての説明があった。基金は23の分野があり、地域、連盟レベルだけでなくチームや個人レベルにも及ぶ。ロンドンオリンピックにおいて、奨学金を受けている1264名（団体も含む）のうち、オリンピックに出場した選手は657名（52%）で、メダルを獲得した選手は76名（6%）であったという。特にOlympic Valueの分野（オリンピック価値の促進、スポーツ医学、環境の持続可能性、女性スポーツ、みんなのスポーツ、オリンピックの教育・文化・遺産）は陸上競技からの申請が少なく、かつ、アジアからも少ない。各国のオリンピック委員会との結びつきを強くし、速やかに情報を得られるようにすることが望ましいと説明した。



Generation “Y”

“Y”とは“Young”のYを指す。つまり若者世代である。社会や文化が変わりゆく現在では、大人（指導者）が子どもだった頃の様子を当てはめることができない。インターネットや電子機器などの発達で、子どもは一人であることが多くなり、一人でやることを好んだり、1つのことをやり続けることが苦手になっているようであると述べた。それに合わせて指導者も変化しなければならず、様々な種目をローテーションしながら実施して楽しませたり、チームを意識したり、より子ども達と交流を持つことが大切であると述べた。



Communication & managing conflict

選手や仲間とのコミュニケーションの話題であった。コミュニケーションをとる時には、様々なコンディション（体調や環境など）によって変化すること、目の周辺の動きは表情をよく反映しているの、選手とコミュニケーションをとる時にはサングラスを外すべきであるとのことであった。次に対立（conflict）の話題であったが、具体的な場面においてどのような解決方法があるのかを2グループに分かれて意見交換した。いつでも“I win, you win”になるわけではなく、どちらかが妥協したり、失敗に終わることもあることを考慮しておく必要があるとのことであった。

Changes

変化するということは連続性があり、徐々に進行していくものである。変わることは悩むことではないという。世界的に陸上競技が変化するためには、まずは個人、次に集団・組織、そしてより大きなシステムに波及していく。具体的には、国際陸連が変わるためには、まず各国の連盟が変化しなければならないということであった。

次にMelek氏から孫氏に代わり、各国の変わらなければならない点を述べる機会が与えられた。日本からは、まず育成システムを挙げた。特に日本の若い選手の育成は学校教員に頼っている。教員も校務との両立で疲弊しているため、地域クラブの発展やの地域の指導者の活用が必要であることを述べた。他国からは、優秀なコーチの不足、競技会の不足、育成システムの不整備、予算の不足、若い選手の獲得不足などが挙げられた。

アジア陸連が変わらなければならないことについても意見が求められ、アジアレベルでの合宿の増加、セミナー・コーチ教育の充実などが挙げた。

Structural model of talent development “kids to elite”

まずは自国の陸上競技のレベルアップが重要で、そのためには短期的・長期的な計画が必要である。シニアの競技レベルとジュニア（日本でいう高校生あたり）の競技レベルは接近している（特に中長距離）ことから、ジュニア期に高いレベルに到達していないとシニアでハイレベルまで高めることができないと述べていた。

タレント選手の育成は複雑であるが、その要因として選手を取り囲む環境が刻々と変化していることを挙げた。指導者や組織は、選手の身体の健康を守るだけでなく、マスコミなどから守ることも大切で、そういった細かな気

遣いが重要な場面での勝負を分けるという。

前述したように、現在の若い世代は、指導者が若かった頃と意識も環境も違う。若い世代を育成するためには、陸上競技の種目に限らず様々なスポーツや種目に取り組みせて、陸上競技の面白さを教えなければならない。スウェーデンの選手は12～14歳あたりで4～5種目を経験し、それ以降で種目を絞っていくという。陸上競技でもアジリティー（敏捷性）が重要であることを述べ、北京世界選手権の女子200mで優勝した選手は七種競技でも世界トップクラスであることを例として挙げた。

Strategic planning

発展戦略を練るにあたって、ビジョン、目的、焦点分野、計画、行動が重要で、SWOT分析が紹介された。分析にあたって、内部的な事柄（選手やコーチなど）と外部的な事柄（施設や資金など）があり、具体的にオーストラリアのラグビーチームのSWOT分析の例を解説した。

SWOT and action plan

各国の事情をSWOT分析し、プレゼンテーションする機会が与えられた。日本の強み（Strength）として、学校教員によって選手育成が支えられていること、マラソン・駅伝文化が根付いていること、多くの競技会が設けられていることなどを挙げた。弱み（weakness）として、収入の多くを企業に頼っていること、長期計画が整備されていないこと、プロのコーチがほとんどいないことなどを挙げた。機会（opportunities）として、2020年に東京オリンピックを控えていること、ロードレースが全国各地で毎年、新規に設立されていること、スポーツ庁が設置されたことなどを挙げた。脅威（threat）として、他のスポーツと選手の奪い合いになっていること、子どもの人口が減少していること、審判の高齢化が顕著であることなどを挙げた。

最後に

日中韓対抗があるように中国と韓国とは特比較的親密にしているが、ベトナムやラオスなどとはほとんど交流がないことを改めて感じた。それらの国の選手と合宿をしたり、コーチを派遣するなどしてレベルを高めることは、東アジアの陸上競技のレベルアップにつながるだろう。それは我が国のレベルアップにつながり、世界との距離を縮めるきっかけになるかもしれない。今後、東アジアの連携が強化されることを期待したい。

国際陸上競技連盟 (IAAF) 技術委員会報告

陸連事務局事業部国際専任部長 関幸生 (IAAF 技術委員会委員)

2016年1月30日～31日、モナコのIAAF本部でIAAF技術委員会会議が開催された。

昨年、北京で開催されたIAAF総会の選挙で再選され3期目となる4年の任期の最初の会議であった。

技術委員会は、「競技規則に関するすべての問題を取り扱う」とされ、委員長と17名の委員をもって構成されている。

昨年の改選を前に、長年委員を務めた複数が引退を表明したことで、選挙の結果、大幅な顔ぶれの変化があった。委員長を含め前職が7名に対し、初当選が過半数の11名という構成となった。大陸別では、ヨーロッパが10名と過半数を占め、北中米カリブが3名、アジアが2名、オセアニア、アフリカ、南アメリカが各1名となっている。多くの新人が加わったことで委員会が若返るとともに、ITO資格保持者の割合が増え、実に活発な意見交換ができたことは有意義だった。一方で、地域バランスを考えると、アジアは、私の初当選以降、中国と日本の2名だけなので、会議で日本やアジアからの提案を通すためには、まずは他の地域の事情を理解したうえで、協調することが必要となってくる。

IAAF憲章では、選挙が主目的の総会と規則修正が主目的の総会を2年ごとに交互に実施することになっており、来年、ロンドンの総会で大規模な規則の修正がおこなわれる予定となっているので、各国からの提案を検討することになる来年の技術委員会は長時間の審議を覚悟しなくてはならない。本年は総会がないので、比較的議題は少なめであったが、それでも、緊急性の高い提案を中心に約100の案件を検討した。

本連盟競技運営委員会と施設用器具委員会で議論となっている内容も、私の委員就任以降、多数、提案や問い合わせという形で議題に入っている。

技術委員会は、規則に関するといってもその内容は多岐に及ぶため、ジャンルごとに複数の分科会が設けられている。2日間の会期中、初日に分科会が事前検討した結果を2日目の全体会議で審議するという会議の進め方をとっている。

昨年までは、「競技規則」、「競技場」、「テクノロジー」、「用器具」の4分科会に分かれていたが、今回から、競技場と用器具がひとつなり、あわせて3分科会制となった。私は過去2期にわたり、用器具分科会長をつとめていたが、今期、「施設/用器具」分科会長に指名された。競技規則分科会にはすべての大陸から委員が加わるよう配慮がなされているが、施設/用器具分科会の構成は、イギリス、アイルランド、スウェーデン、フランス、日本の5名であり、経験豊富な面々である反面、私以外が全員ヨーロッパであることから、会議の冒頭で、世界一競技会が洗練されているヨーロッパだけでなく、立ち遅れている他の地域の実情も考慮した議論をして欲しいとメンバーに伝えた。

2日目の全体会議で委員の賛同を得た案件については、カウンシル会議に提案され、承認されれば、緊急性のある内容については即発効となることもある。また委員会では規則の解釈についても議論を重ねており、IAAFルールブックを補う形で数年ごとに発行されているルール解説本「Referee」の中で補足説明されることになる。本年3月中旬に最新版が刊行され予定である。

◆IAAF新体制

会議では、分科会の際にセバスチャン・コー新会長が委員を激励。翌日の全体会議では冒頭、就任したばかりのジャン・グーラシアCEO/事務総長から、新任の挨拶がなされた。しかし例年なされているIAAFの活動についての報告はなく、今のIAAFが置かれている混乱の中、改革途上という状況下では、あまり多くを語ることができないという印象であった。また新会長就任にあたっての「陸上競技をより魅力的なものにする」というコー会長の公約を受けて、委員会での議論でも、「規則がどうあれば、陸上競技が魅力的なスポーツとなりうるのか」を念頭に置くよう求められていると感じた。

◆主要議題 (緊急の規則変更提案)

今回は選挙後の委員会初年度ということもあり、多くの議論は、2017年にカウンシル会議に提案され、同年11月1日発効させるた

めのものであったが、いくつかの緊急性がある内容については、本年3月のカウンシル会議に提案され、可決されれば、即発効となる予定である。以下の内容である。

【規則166条1/180条9】

ヨーロッパ陸連カウンシルは域内での選手権大会で新しい競技方式を取り入れることを決定した。つまり「トップ選手が予選や準決勝に参加することなく決勝できる」というものであるが、現行の規則のもとでは、実施できないことから、例外条項の追加を緊急提案してきた。委員会は、この提案を受け入れることとしたが「すべての選手に平等であるべき」という規則の根本を尊重した条項の表現が必要となる。

【規則185条1 (a)】

距離の跳躍で、無効試技の解釈として、踏切線の先の「地面」に触れたときとあるが、「粘土板及び粘土」が「地面」なのかという解釈の齟齬が北京世界陸上で発生したことから、「粘土板のいかなる部分をも含む地面」という表現に改めようという提案である。

◆主要議題 (その他 2017年提案に向けて)

これ以外の作業部会ごとの主要議題と技術委員会の見解はつぎのとおり。

競技規則

【規則125条1】

本年度から規則に追加された「ビデオ審判長」の職務や手続き、他の審判長とのコミュニケーションに関する暫定版ガイドランを至急作成し、2016年に開催されるオリンピックとIAAF主催大会で実際に運用することが決まった。そのうえで、シーズン後に内容について精査することとなった。

【規則162条6】

規則改正により不正スタートの定義が変更となり、号砲前のピクピクといった選手の動きは不正スタートではないのだが、いまだスターターはじめ競技役員の間で誤解が存在している。国際スターターが任命されているIAAF主催大会でも誤解による失格告知が発生してしまっていることから、周知に努めるとともに今春発行予定の規則解釈本「Referee」により詳細な解説を加えることが確認された。

併せて、こうしたミスにより失格を宣告された選手の救済され方についても議論があった。つまり北京世界陸上で「予選を走ることなく準決勝進出」が果たして正しい判断だったのかといった点である。過去、IAAF主催大会では、一人で走らせ、次ラウンド進出のプラスα相当の記録だった場合「q」で資格を与えてきていた。ミスがないことが一番だが、万が一の場合の処置について不公平がないよう議論が継続される。

【規則180条3 (b)】

今年度から追記された「フィールド競技で使用するマーカー1つからなるもとし、複数を積み重ねたりしてはならない」という条文について、ブロックのように複数個を組み合わせてマーカーを作る製品が市場に出ていることから「ひとつに結合したもの」という解釈が確認された。さらに走高跳では「複数のテープを付け合わせることも」また「ひとつのテープの途中を切り裂き特徴的な形とする」とも、この解釈の範囲内であることが確認された。

【規則181条8 (d) 及び181条9】

高さの跳躍の1位決定戦について現行規則では、対象の選手すべてが同意すれば決定戦を実施せず複数が優勝となることが認められている。実際2年前の世界室内選手権の女子走高跳では2名が金メダルであった。この規則について何らかの修正が必要か議論がなされたが、現状、大きな問題は起こっていないとの理由で、見直しは不要との結論になった。

【距離の跳躍での実測値の計測】

距離の跳躍で観客サービスとして、踏切板からの距離だけでなく、実測値も知らせてはどうかとのアイデア持つ人たちもいる。しかし技術委員会として、むしろ混乱を招く可能性を危惧し、競技中は、規則通りの距離のみを公表すべきである、との結論に至っ

た。ただし競技後にこうした情報が提供されることには異をとらぬものではない。

【スターティングブロックの定義変更】

本連盟競技運営委員会内でも、スターティングはどの部分を指すのかという定義について議論があり、昨年のIAAF技術委員会でも照会したところ、現行の英文では「フットプレート」のみをスターティングブロックと定義していることが確認された。しかし本ルールは、土のトラックでフットプレートのみを使用していた頃からの名残でもあるとの考えもあり、定義をシャフトも含む「全て」に変更しようという動きがある。ただし、「スターティングブロックはレーン内になければならない」という規則のままで、シャフト部分がトラック外側に出てしまったケースなどトラブルも想定されるため、「例外として認める」などの補足もあわせて検討する必要があると確認された。

競技場/器具

【IAAFクラス認証の有効期間】

IAAFクラス認証競技場の有効期間を5年とすることが決定された。詳細は後述。

【投てき用具の重量規格】

投てき用具の規格中に販売時の重量の範囲が記載されているが、これは製造会社に求める要件であり規則中にあるのは相応しくないとの考えから、規則からは削除し、IAAF認証制度の手続きガイドラインに移されることとなった。

【投てき可能な人工芝】

IAAF規則では「着地場所は、痕跡が残るシンダーや芝生または適当な素材でつくらなければならない」と定められているのみであり、「人工芝がダメ」とはどこにも書かれていない。すでに実用化されている日本製の「投てき可能な人工芝」は、痕跡も残り、実際の投てき競技会も実施されていることから、「IAAF規則に反していない」との技術委員会の確認が取れている。他方、将来的にIAAF認証の品目に加えるための検査必要項目などの検証が検査機関で継続されている。

【継続審議】

- 円盤投用囲いの高さを4mより高くすること
- 室内用砲丸投用囲いの規格の変更の必要性
- ユース用700gやりの胴体着陸が極めて多いことから重心移動が適当かどうか
- やりの構造のなかで「先端 (tip)」とはどの部分を指すのかの定義づけ
- 400mは屋外、200mは室内の概念を取り払い、屋外室内共通の記録として例えば「ロングトラック」「ショートトラック」といった新しい概念導入の可否
- IAAFクラス認証の測量する担当者対象の教育プログラムの実施計画

テクノロジー

【スタートインフォメーションシステム】

先述にもあったが、不正スタートの解釈間違いの事例に鑑み、スタートインフォメーションシステムから得られる情報をどのように解釈し使うべきなのか教育的素材を提供する必要があると定義された。

また、スタートインフォメーションシステムの開発で先行する5社のシステムについて、IAAFと提携するドイツ・ケルン大学の実験場でのテストを経て、初の公式な認定が今年の競技会シーズン開始前になされることが確認された。

【トランスポンダーシステム】

現在、トランスポンダーシステムには「アクティブ」と「パッシブ」の2種類があり、現行の規則上では両者とも公式計時として認められているが、検証が必要であることが提議された。

【風速計】

規則163条10及び184条11の「風速計の高さ」とは計測装置部分の位置であることが確認されるとともに、この高さの誤差をどこまで認めるか2017年に提案することとした。

【競歩のセンサー感知】

競歩のロスオブコンタクトをセンサーで検知しようとする実験が継続されていることが報告された。

【継続審議】

- スタートインフォメーションシステムの位置づけに関する条

文の変更「絶対的なもの」から「審判が正しい判断を下すための情報手段」へ

- スタートビデオシステムの利用法の検証
- 200mの風速計測を開始するタイミングについての現行規則の表現が適当かの検証
- スタートの号砲の音の最小限度を定める必要があるか

このほか、ルールブックの解説書「レフェリーブック(審判方法)」の新版が2016年3月中旬を目標に刊行されることが報告された。また2017年に発行されるルールブックは、2分冊となり、1冊には第5章の競技規則とその解説、もう1冊はその他の章のアンチドーピング規則などを含むことが確認された。

◆IAAF承認競技場の更新制度の導入

毎年、時報で報告しているが、IAAFは、競技場及び用器具の承認システム推進を積極的に進めている。競技場認証は、クラス1と2という2つの種別に分かれているが、この制度を担当するのも技術委員会である。この数は世界規模で増加傾向にあり、近年、この認証システムの理解が進んできていると感じる。IAAFやアジア陸連の大会を開催するには承認は必須であり、世界記録及びアジア記録の公認にも必要である。また2020年の東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿誘致を目指す自治体にとっては、世界基準のスタジアムは有効なPR材料となる。

IAAFは、世界のどこにいても、すべての選手が同じ条件下で競技記録が残せることを目的として、承認競技場の世界的普及を推し進めている。そのため途上国でも競技場承認が可能となるよう最低限守るべき基準を設定している。他方、日本には歴史ある競技場の公認制度が存在するが、スタンドの客席数や用器具の必要量の常備などIAAFより基準が厳しいほか、公認期間とその更新も厳格に定めているなど、世界に誇るべきものである。

日本では5年に1回、公認継続のための検定が義務付けられているが、IAAF認証は、これまで、有効期限を設けていなかった。この制度の世界的普及を考えれば、更新の手続きや更新料を設定しないにこしたことがないことは理解できるが、この制度が世界的に認知され認証施設が増えるに従い、問題も少なからず報告されるようになってきた。舗装材や緑石の劣化や破損、また地盤沈下により水たまりのできたトラックなどである。昨年の技術委員会では認証の有効期限について議論がなされた。結論が持ち越されていたが、今回、認証後5年で再申請 (Re-Newal) を義務付けることが決議された。再申請時の検定方法や再申請料、および有効日については後日、発表される。

◆トラック舗装材レベル分け

IAAF認証のトラック舗装材について、今後、さらにレベル分けすることがIAAF本部から提案され議論された。その詳細は、これから検討されるが、背景としてIAAF認証を保持していても、IAAFクラス認証施設(競技場)で使用された実績がまったくない製品もあり、IAAF認証施設や国際イベントでの使用実績がある製品との差別化を図りたいとのIAAFの思惑がある。IAAFサプライヤー企業に有利であると感じられる一方で、承認品としてリストアップされているものの、実際の施工実績がない製品が差別化できるのであれば、新規の施設建設予定者が不利益を被るリスクを軽減できるというメリットはあるのかもしれない。

レベル分けの方法として、考えられるのは、IAAF認証施設何処かに使用されているか、とかIAAF主催大会にどれだけ使用されたか、などであるが、この議論ははじまったばかりであり、決定には少なくとも1年以上が必要となる。

◆審判、競技、用器具関連のIAAF出版物

毎年、時報で紹介しているが、技術委員会は競技に関する各種の出版物を編集しており、IAAFサイトからダウンロードも可能である。先に報告したとおり、本年は、規則解釈のための「Referee」の最新版が刊行されることになっている。あわせて「IAAF施設マニュアル」もルールブックを補完する書物として位置付けられている。ルールブックに記載がなくとも、これら2冊に記載があれば、規則と同じ扱いがされるということになる。

このほか、「競歩審判法」、「スターターガイドライン」、「国際写真判定員ガイドライン」といったガイドも発行されており、国際的に推奨される基準が網羅されている。日本で推奨されているのとは異なる内容もあり、世界ではどうしているのかを知ること必要であると感じる。

[訂正版]2015数字で見る陸上競技 Vol.4 都道府県別高校生陸上競技部員割合

事務局

2015数字で見る陸上競技、4回目の今回は、高校生の陸上競技部員の全高校生生徒数における割合を都道府県別にご紹介します。2014年度の日本陸上競技連盟における高校生登録者を、同年度の高校生生徒数（文部科学省調べ）で割ったものです。

【算出方法】割合（％）＝（高校生陸連登録者数）÷（高校生全生徒数）×100

都道府県名	2014年度高校生陸連登録者数	前年比	前年数	2014年度高校生全生徒数	2014年度割合	2013年度高校生全生徒数	2013年度割合
北海道	4,450	91	4,359	134,616	3.3%	134,359	3.2%
青森	1,625	-1	1,626	38,266	4.2%	38,001	4.3%
岩手	1,748	-17	1,765	35,879	4.9%	35,750	4.9%
宮城	2,553	164	2,389	61,583	4.1%	61,477	3.9%
秋田	1,484	-35	1,519	26,926	5.5%	26,882	5.7%
山形	1,636	66	1,570	31,945	5.1%	31,818	4.9%
福島	2,117	130	1,987	54,952	3.9%	54,705	3.6%
茨城	2,338	214	2,124	79,089	3.0%	78,929	2.7%
栃木	1,507	80	1,427	54,446	2.8%	54,446	2.6%
群馬	1,718	29	1,689	53,421	3.2%	53,421	3.2%
埼玉	5,575	228	5,347	178,511	3.1%	178,294	3.0%
千葉	5,727	199	5,528	152,666	3.8%	152,565	3.6%
東京	8,435	318	8,117	316,058	2.7%	315,966	2.6%
神奈川	6,034	216	5,818	205,223	2.9%	205,023	2.8%
新潟	2,638	148	2,490	61,504	4.3%	61,476	4.1%
富山	1,203	76	1,127	28,857	4.2%	28,574	3.9%
石川	1,315	34	1,281	32,306	4.1%	32,233	4.0%
福井	798	40	758	23,235	3.4%	23,159	3.3%
山梨	996	50	946	26,346	3.8%	26,379	3.6%
長野	1,764	106	1,658	59,093	3.0%	59,093	2.8%
岐阜	2,251	84	2,167	56,681	4.0%	56,652	3.8%
静岡	4,147	152	3,995	100,819	4.1%	101,048	4.0%
愛知	7,654	172	7,482	198,951	3.8%	198,742	3.8%
三重	2,291	120	2,171	50,583	4.5%	50,483	4.3%
滋賀	1,672	136	1,536	39,510	4.2%	39,513	3.9%
京都	2,501	115	2,386	72,147	3.5%	72,018	3.3%
大阪	6,561	242	6,319	236,529	2.8%	236,403	2.7%
兵庫	5,827	288	5,539	145,112	4.0%	144,968	3.8%
奈良	1,215	79	1,136	37,537	3.2%	37,390	3.0%
和歌山	851	4	847	28,523	3.0%	28,446	3.0%
鳥取	755	-6	761	15,500	4.9%	15,419	4.9%
島根	855	10	845	18,889	4.5%	18,852	4.5%
岡山	1,603	104	1,499	55,306	2.9%	54,948	2.7%
広島	2,907	48	2,859	74,445	3.9%	74,373	3.8%
山口	1,758	70	1,688	35,340	5.0%	35,058	4.8%
徳島	555	12	543	19,983	2.8%	19,904	2.7%
香川	916	-28	944	26,472	3.5%	26,202	3.6%
愛媛	1,429	56	1,373	36,071	4.0%	35,840	3.8%
高知	553	-62	615	19,831	2.8%	19,583	3.1%
福岡	4,313	265	4,048	133,038	3.2%	132,049	3.1%
佐賀	1,255	32	1,223	25,711	4.9%	25,562	4.8%
長崎	1,988	30	1,958	40,868	4.9%	40,571	4.8%
熊本	1,620	-38	1,658	49,680	3.3%	49,211	3.4%
大分	1,022	22	1,000	32,787	3.1%	32,337	3.1%
宮崎	1,013	-18	1,031	33,345	3.0%	32,869	3.1%
鹿児島	1,507	16	1,491	48,026	3.1%	46,721	3.2%
沖縄	897	121	776	47,413	1.9%	47,353	1.6%
合計	115,577	4,162	111,415	3,334,019	3.5%	3,325,065	3.4%

※高校生全生徒数は、文部科学省ホームページ統計情報（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/main_b8.htm）内、学校基本調査の高等学校＞全日制・定時制 学年別生徒数 からの抜粋

※2016年3月号に掲載しました「2015数字で見る陸上競技 Vol.4 都道府県別高校生陸上競技部員割合」に誤りがありましたので、訂正版を掲載しました。お詫び申し上げます。

大会観戦ガイド

第100回日本陸上競技選手権大会50km競歩 兼第31回オリンピック競技大会(2016/リオデジャネイロ) 男子50km競歩代表選手選考競技会 第55回全日本競歩輪島大会

50km競歩の日本選手権が迫りました！日本トップウォーカーたちが今夏にブラジル・リオデジャネイロで開催されるオリンピックの日本代表を懸けて争います。熱い競演にご期待ください！

▼種目・スタート時間：

4月16日(土) 全日本競歩輪島大会

男子全日本10km競歩	13時00分
男子ジュニア10km競歩	13時00分
女子全日本10km競歩	13時05分
女子ジュニア10km競歩	13時05分

4月17日(日) 日本選手権

50km競歩	7時30分
--------	-------

4月17日(日) 全日本競歩輪島大会

女子高校1・2年 3km競歩	9時00分
女子高校 5km競歩	9時30分
男子高校1・2年 3km競歩	10時30分
男子高校 5km競歩	11時30分

▼コース：輪島市文化会館周回コース・日本陸連公認競歩コース(1周2kmの周回コース)

▼アクセス(石川県輪島市文化会館付近)：

石川県輪島市文化会館は「道の駅輪島」ふらっと訪夢前。

・能登空港からふるさとタクシーを利用。能登空港発着便に合わせて利用可能(要予約)。

運賃一律900円(1人/片道：輪島市内) 乗合

予約先 港タクシー TEL：0768-22-2360

・能登空港より特急バス約

20分「輪島駅前」下車

・「金沢」駅より特急バス約120分「輪島駅前」下車

▼問合せ：輪島市教育委員会生涯学習課スポーツ推進室全日本競歩輪島大会実行委員会事務局
TEL：0768-23-1176

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1369/>



昨年度の優勝者・荒井広宙(自衛隊体育学校)

第18回長野マラソン

1998年に開催された長野冬季オリンピックを記念して1999年より開催の長野マラソン。エムウェーブ、ホワイトリンク、ピックハットなどのオリンピックが開催された会場前を通るコースに、10,000人が集います。

▼日時：4月17日(日) 8時30分スタート

▼コース：長野マラソン長距離競走路

(スタート) 長野市吉田・長野運動公園

(フィニッシュ) 長野市篠ノ井東福寺・長野オリンピックスタジアム

▼アクセス：

・長野運動公園

しなの鉄道北しなの線「北長野」駅下車、徒歩約20分
長野電鉄「信濃吉田」駅下車、徒歩約20分

・長野オリンピックスタジアム

JR篠ノ井線、しなの鉄道線「篠ノ井」駅東口より、徒歩約30分

長野駅・篠ノ井駅よりシャトルバス

▼問合せ：長野マラソン大会組織委員会事務局

TEL：026-234-6380

(受付時間：平日9：30～17：00)

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1370/>

▼大会公式サイト

<http://www.naganomarathon.gr.jp>



昨年度のスタートの様子



JAAF SHIGA 一般財団法人滋賀陸上競技協会

〒520-0037 大津市御陵町4-1 皇子山陸上競技場内2-1室
TEL.077-527-3925 FAX.077-527-3925
<http://www.biwako.ne.jp/~srkshiga/>

全国都道府県対抗男子駅伝
滋賀県チーム 12位の快挙

広島県で開催された第21回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会において、滋賀県チームは、歴代2番目となる12位でフィニッシュしました(第1回大会では花田選手<現上武大監督>がアンカーを務め4位入賞)。今回、小澤監督は「8位入賞を大きな目標に粘り強く走り抜き、滋賀県らしく明るく爽やかなタスキリレーを目指します」と言っていました。順位は届かなかったものの、2時間22分44秒は、歴代最高タイムを樹立いたしました。

また、和歌山国体では男子共通400mリレーで桐生(現東洋大)選手が快走し第2位の快挙を成し遂げました。平成36年の滋賀国体も決定しています。今年度2つの快挙を強化元年と位置づけ、前進していく所存です。全国の皆さんからのご支援ご協力をお願いいたします。(文責:強化委員長 村上拓)

JAAF OSAKA 一般財団法人大阪陸上競技協会

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-1 大阪市長居陸上競技場内
TEL.06-6697-8899 FAX.06-6697-8766
<http://www.oaaa.jp/>

OSAKA2020夢プログラム指定選手大阪エンジョイRUNにゲスト出演(ヤンマースタジアム長居)

1月31日「第35回大阪国際女子マラソン大会」のサブイベント大阪エンジョイRUN「Road to 2020! みんなでチャレンジ!」が開催され二千名超の市民ランナーが参加。当プログラム指定競技者の石塚晴子さん(東大阪大学敬愛高校 400m・400mH)や郡菜々佳さん(東大阪大学敬愛高校 砲丸投・円盤投)ら12名がゲストランナーとして参加。約3キロのコースを参加者と一緒に走りいい汗を流した後、お立ち台で今年の目標についてインタビューを受けました。このイベントにはシドニーオリンピック女子マラソン金メダリストの高橋尚子さんやアトランタオリンピック1万メートル5位の千葉真子さんらがゲスト参加、リオデジャネイロオリンピックや2020東京オリンピックに向けて活動する若きアスリートへのこもったエールを贈りました。



JAAF KYOTO 一般財団法人京都陸上競技協会

〒615-0872 京都市右京区西京極南衣手町57番2
TEL.075-322-5500 FAX.075-322-5501
<http://www.krk26.jp/>

昨年12月に開催された全国中学校駅伝大会で、桂中学校女子チームが優勝、連覇を達成しました。3区間で区間賞を獲得し、コース新記録樹立という「女王のレース」を展開しました。優勝候補の最右翼というプレッシャーをものともしない走りは「駅伝京都」の名にふさわしいものでした。

2017年は、駅伝が始まって100年となる記念すべき年です。これを記念しての取り組みを、京都陸協や関係諸団体で鋭意検討を進めています。

(文責:広報部長 相模浩史)



桂中学校陸上競技部

JAAF HYOGO 一般財団法人兵庫陸上競技協会

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号
神戸市生涯学習支援センター内
TEL.078-231-1771 FAX.078-231-1772
<http://www.haaa.jp/index2.html>

第5回神戸マラソンが11月15日に開催されました。クォーターマラソン2,039人を合わせた19,660人が参加、好天にも恵まれ、完走率は96.9%となりました。沿道に61万人の切れ目ない応援を受けて、快適に走ることができたと思います。

男子第70回・女子第31回兵庫県都市区対抗駅伝競走大会が、2月7日に加古川河川敷マラソンコースで開催されました。「駅伝兵庫」と言われる基礎となっている大会です。1部から3部までが各10チーム、4部は15チームの編成で実施しました。中学生が2区間を走り、有力選手も「ふるさと選手」として各都市区に帰り、白熱した大会となりました。

第99回日本陸上競技選手権大会男子・女子20km競歩が、2月21日六甲アイランド甲南大学周辺コース(日本陸連公認コース)で開催されました。男子では、3名の選手が陸連派遣設定記録を突破し、1時間18分26秒で優勝した高橋英輝(富士通)は、リオオリンピック競歩代表選手に内定しました。

第2回世界遺産姫路城マラソンが2月28日に開催されました。姫路城を背に大手前通りをスタートしました。

第36回篠山ABCマラソン大会は市民ランナーが出場する大会として歴史ある大会で3月6日に10,000人が篠山城跡地からスタートしました。

4月9、10日の県記録会が平成28年度競技会の皮切りとなります。4月24日には64回兵庫リレーカーニバルが実施されます。この大会は、リオオリンピック代表選手選考競技会を兼ねており、選手達のパフォーマンスが楽しみです。

陸協NEWS



JAAF
NARA

一般財団法人奈良陸上競技協会

〒630-8113 奈良市法蓮町349-1 コーポラス一条415号
TEL.0742-27-2312 FAX.0742-27-2312
http://www.narariku.com/

はじめに、当協会の評議員であり「奈良マスターズ」の事務局長である岡本貴様が昨年10月に急逝されました。毎年、奈良マスターズ大会には近畿はもとより全国から多くの選手の参加をいただいて開催しておりますが、これも岡本評議員のご苦勞が実ったものでした。岡本評議員の功績に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

評議員に欠員が生じたため、年度末の評議員会で新しく安田昭雄様(奈良マスターズ)が評議員に推挙されました。

さて、2015年度を振り返りますと競技力の低迷が目立った1年でした。近年、普及と強化に重点を置いて取り組んでまいりましたが課題が山積しており、組織のあり方から指導方法に至るまで一から点検しなければならないと思われます。また、中学生の県外流出についても中高一貫で真剣に対策を立てなければならぬ時期を迎えていると思われれます。中学生の競技力は全国的にも十分戦える戦力を有しており、この選手たちの具体的な強化策を明確にし、強いのは念願のオリンピック選手の育成に繋げていきたいとおもいます。

第34回全国都道府県対校女子駅伝開催を期に、京都に奈良県友会が結成されました。奈良県にゆかりのある方が中心になり会をまとめて頂きました。今回の戦績は残念ながら下位に甘んじましたが、皆様への期待に添えるよう一層強化を深め、今年度の大会に臨みたいと担当者一同、意を新たにしております。

JAAF
WAKAYAMA

一般財団法人和歌山陸上競技協会

〒641-0014 和歌山市毛貝200 紀三井寺公園陸上競技場内
TEL.073-444-3662 FAX.073-444-3662
http://wariku.com/

第70回紀の国わかやま国体が昨年和歌山県で開催され、本県が天皇杯を獲得、目標を達成して無事終えることができました。これも日本陸上競技連盟のご指導のおかげだと感謝いたしております。

紀の国わかやま国体に先立って全国高等学校陸上競技対校選手権大会(昨年7月29日～8月2日)が猛暑の中、本県で開催されました。開催中の5日間で延べ74人が救護所で処置を受け3人が救急搬送(熱中症1人、脱臼1人、腹痛1人)され、44人の熱中症が発生しましたが救護所において医師、看護師、その他関係者の適切な現場処置により病院への救急搬送を最小限に止めることができました。

この結果を基に検討し問題点を改善、各部署との連携を密にして国体の救護活動に望みました。幸い天候に恵まれ、国体開催中の5日間で延べ31人が救護所で処置を受けましたが救急搬送は無く、熱中症も4人と少なく殆んど外傷であり、トラブルも無く救護活動ができました。

28年度は2016日本グランプリシリーズ第3戦:2016日本選抜陸上和歌山大会から始まり各大会が開催されますが全国高等学校陸上競技対校選手権大会、紀の国わかやま国体で得た経験と実績に基づき救護関係者の知識、技術の向上に努め安心して競技運営ができる救護体制を築いていきたいと考えています。

(文責:医事部長 浜辺明)

JAAF
TOTTORI

一般財団法人鳥取陸上競技協会

〒680-0944 鳥取市布勢146-1
コカ・コーラウエストスポーツパーク陸上競技場(第2研修室)
TEL.0857-28-6540 FAX.0857-28-6540
http://www.hal.ne.jp/trk/

鳥取県を2日間かけて横断する米子～鳥取間駅伝70回開催記念企画で10月に原晋、山下佐知子、森下広一の3氏によるパナールディスクッションを開催しました。70回連続開催の意義、駅伝の醍醐味、日本長距離界への提言等、非常に有意義なお話で大会を大いに盛り上げていただきました。100回連続開催に向けて新たなエネルギーをいただきました。

4月30日～5月1日に「日本パラ陸上」を開催します。大阪以外では初の開催、リオパラリンピックの選考会ともなるため、緊張感を持って、総力を挙げて準備をしています。競技場のバリアフリー化、トラック走路舗装材の全面張り替え、大型表示板の改修、雨天練習場舗装材の全面張り替え等、急ピッチで改修を進めています。また、日本初となる身障者専用の投擲用固定器具の設置も行います。3月に審判講習会、4月に中四国障害者陸上大会を経て本番に臨みます。記録の出る競技場として広く認知されている布勢競技場ですが、障がい者に優しい競技場として、さらには障がいのある人もない人もともに楽しめる競技場としてパワーアップをしたいと考えています。将来的には、布勢運動公園を鳥取県版の代々木オリンピックセンター、国立スポーツ科学センター、岸記念体育会館の機能を持つ鳥取県スポーツの大拠点とする計画を県と市の絶大なご支援をいただき、具体化しつつあります。あわせて、国際規格クラスⅡの取得も目指しています。ボルト選手が来ても、桐生選手が来ても対応できるように、さらに競技場としての総合的な機能アップを図りたいと考えています。

(文責:専務理事 新田明彦)

JAAF
SHIMANE

一般財団法人島根陸上競技協会

〒690-0015 松江江市上乃木10-41 松江市営陸上競技場内
TEL.0852-23-6686 FAX.0852-23-6686
http://www.shimariku.jp/index.html

平成28年1月30日(土)・31日(日)に一般財団法人島根陸上競技協会常務理事会並びに理事会を開催し、栄章受賞者と、各専門委員会、専門部の中間報告、平成28年度の行事予定について審議しました。理事会後には平成27年度島根陸上競技協会栄章授与式を行い、功労賞8名(青戸勝正、安部隆、永瀬治行、勝部恵、船木進、大久保稔、日野佐知子、藤田佳克)、勲功章3名(青山聖佳、福田翔子、尾崎千里)、優秀指導者賞10名、優秀選手賞12名の方々に森脇副会長より授与されました。

平成28年4月待ちに待ったトラックシーズンが幕を開けます。4月3日(日)「第71回穴道湖一周駅伝競走大会」が開催されます。松江市営陸上競技場を発着し7区間61.1kmを1部(市町村対抗)、2部(クラブ等の対抗)、3部(高校対抗)で競われます。昨年は1部11チーム、2部42チーム、3部4チームの合計57チームの参加がありました。今年度の大会にも多くのチームが、風光明媚な穴道湖畔で健闘を競っていただきたいと思っております。

また、4月23日(土)24日(日)には「吉岡隆徳記念第70回出雲陸上競技大会」が開催されます。日本陸上競技連盟の後援をいただき、今年は記念大会としてBIGな招待選手を招き、男女招待100m・300m、招待高校男子5000m、招待高校女子3000mのレースを行います。現在記念大会の招待選手は選考中ですが、この4月号が発売される頃には記者発表があると思います。招待選手並びに地元選手の活躍を期待しています。

(文責:総務委員長 矢野力)

事務局からのお知らせ

◆◆2016年トラック&フィールドシーズンが始まります！◆◆

今夏、ブラジル・リオデジャネイロで開催される第31回オリンピック競技大会の代表選手を目指すトラック&フィールドシーズンが始まります。2016日本グランプリシリーズは下記日程で開催されます。新たなスターの誕生を、競技場で楽しみください！

【2016日本グランプリシリーズ】

- 第1戦 第64回兵庫リレーカーニバル
大会日：2016年4月24日（日） 会場：ユニバー記念競技場
<http://www.haaa.jp>
- 第2戦 第50回織田幹雄記念国際陸上競技大会
大会日：2016年4月29日（金・祝） 会場：広島広域公園陸上競技場
<http://yasumikiyuki.web.fc2.com/index.htm>
- 第3戦 2016日本選抜陸上和歌山大会
大会日：2016年4月30日（土）～5月1日（日） 会場：紀三井寺公園陸上競技場
<http://wariku.com/>
- 第4戦 第32回静岡国際陸上競技大会
大会日：2016年5月3日（火・祝） 会場：静岡県小笠山総合運動公園エコパスタジアム
<http://www2.wbs.ne.jp/~nagata/t&f/>

◆◆日本陸連公式YOUTUBEチャンネルで動画をチェック！◆◆

日本陸上競技連盟では、公式YOUTUBEチャンネルを開設しています。各大会のLIVE配信やアーカイブ映像、アスリートたちのインタビュー、コーチング動画など、公式チャンネル限定のコンテンツをお楽しみください！

<https://www.youtube.com/c/jaaf>

〈動画リスト（一部）〉

- ・第99回日本陸上競技選手権大会20km競歩フィニッシュシーン
- ・右代啓祐選手出演 ジャベリックボール投 指導動画
- ・「千葉クロスカントリー大会 X-RUN CHIBA 2016」高橋尚子さん推薦コメント
- ・アスレティック・アワード2015 受賞者スピーチ



陸連時報編集委員

◇編集委員

- 横川 浩（陸連会長）
- 友永 義治（陸連副会長）
- 八木 雅夫（陸連副会長）
- 尾縣 貢（陸連専務理事）
- 麻場 一徳（陸連強化委員長）
- 風間 明（陸連事務局長）
- 牧野 豊（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者

- 大嶋 康弘
- ◇時報編集担当
- 繁田 進
- 石塚 浩
- 木越 清信
- 宮田 宏
- 高橋 祐哉
- 小川ちあき

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>